

## 東南アジアとの学術交流

理事 山本 出

1978年から20年間にわたり直接間接に東南アジアとの農学交流にかかわった。その間を通じて思ったことの二三にふれたい。

第一は人間関係である。援助をうけても誇りを傷つけられては人は承服しない。また政府間でいくら援助した、いくらかちとったという類の交流で実をとまわなかつた例を垣間見てきた。金は人を通じて生きも死にもする。学術交流は相手国の研究者を活かすという奉仕の念が心底にあってほしい。それをいうのは、日本への留学生の帰国後の言動にホストの日本人の態度の問題が出てくるからである。この学術交流の管理面は日本学術振興会、相手国の対応機関、東京農業大学が担ってきたが、事業が実を結ぶも泡のごとく消えるのもいつにかかって関係者一人一人のグラスルーツ努力にかかっている。

第二は学術交流の問題である。その一つは学術の下流移転である。明治時代いわゆるお抱え教師が日本の各分野の進展に寄与した功績は大きく、各学問分野の歴史においてもその名を留めている。今日日本から多くの研究者が東南アジアに赴いているが、某国の某分野の発展は日本人某先生による所大である、となることを期待している。また途上国支援には先進各国が競っており、実は援助される側に比較評価されている。それだけに日本と途上国の比較のみでなく、日本と先進各国との比較において学術交流のベストを提示しなければならない。もう一つは学術交流の国際化である。一国の枠をこえた問題・学問対象が多々あり、国際協力が求められている。この場合、日本と相手国研究者が平等の立場にある場合、また先方が主で我々が従となる場合もある。学問の師となる場合、友人となる場合の遣い分けの心くばりがいる。さらに東南アジアは我々に未知の対象・活動分野を提供してくれる。科学技術の最先端分野に挑む

ことも大事であるが、斧を片手に密林に分け入り、未踏の分野を開拓するのも学問である。

第三は使命感の問題である。太平洋戦争を経験した世代として、この戦争は何であったか、犠牲者は無駄死だったか、折にふれ反芻してきた。日本は国内的にはそれなりに立派な文化をもちながら、世界歴史へのインパクトはほとんどなかったといえよう。戦後の経済繁栄もあやしくなり、また歴史をひもといてもフェニキア、カルタゴなどの経済大国は世界歴史にはあまり残らないようである。やはり政治的、文化的卓越性がなければならぬ。太平洋戦争が、日本の敗戦とはいえ近隣諸国が独立する契機となったことは事実だが、まわりに自慢すべきことではない。しかし戦後の歴史を通じて日本が近隣諸国の発展に寄与し、何時の日か東・東南アジアが世界歴史に輝く文明圏となった時はじめて、太平洋戦争というぶちこわしの意義が認識されるのではなからうか。そうなることが非命に倒れた方々を含めて我々の死んだ、また生きたことの意義づけになるのではないか。中国の知識人はここで首くくれば、あるいはここで臥薪嘗胆すれば青史に残ると出处進退に歴史を意識したという。一国の盛衰は世のならい、後世日本は何をなしたかが問われるであろう。活力あるうちに世界歴史に名を留めるべく意識して行動すべきではないだろうか。ふりかえって東・東南アジアと日本の関係は経済が主であるが、これに政治・文化・福祉が表裏一体とならなければいざ日本への貢献が忘れ去られることをおそれている。文化交流の一端を担う東南アジアとの農学交流は小なりとはいえその意義は大であり、これに多少とも関与してきたことを心中いささか誇りに感じている次第である。

(東京農業大学名誉教授、農学博士、  
ヘブライ大学名誉教授)